

薬物依存脱却へ

悩み共有し克服

県警によると、薬物事件の過去10年の再犯者は875人で全検挙者数1557人の半数以上を占めている。薬物依存から脱却した経験を生かし、社会復帰をサポートしている山梨ダルク(佐々木広施設長)は「同じ悩みを持つ仲間と話し合うことで気持ちをコントロールすることが大事」と話す。山梨ダルクの一日を追った。

山梨ダルク

入所者は午前8時に起床。一日の食事は生活保護費から支給される1300円でやり繰りする。朝食は自分たちで炊いた白飯にゆかりをかきけり、近所のコンビニエンスストアでパンを買ったりとさまさまだ。

朝食後、同10時半から朝のグループセラピーが開かれる。回復に向けた決意を仲間にも告げ、同じ悩みを共有し、仲間と一緒に依存症を克服する効果があるという。

「これまでは常に自分のやり方が正しいと頭、周囲に迷惑を掛けしてきた。最近、謝罪の気持ちが出たが、まだ態度を表すことができない」(40歳代男性)。「入所するまで自分に非があるとは考えられなかった。どうやって自分の過ちを認めたらよいか分からなかった」(60歳代男性)と口癖の「入所者は真剣な表情で仲間の話を耳を傾けていた。

薬物事件 半数が再犯

県警によると、覚せい剤取締法違反容疑の摘発人数は今年1~7月までで65人(前年同期63人)と微増だが、県内の薬物事件の再犯率は過去10年間、50・0~62・9%で推移。今年摘発された65人中36人が再犯者で、全体の55%を占める。一方、県内では06年度現在、県立北病院など11病院で71人(薬物)、アルコール64人)がそれぞれ依存症治療を受けていた。



山梨ダルクで行われるグループセラピー

【山梨ダルク】

山梨ダルクは昨年2月、甲府市内に開設。現在、スタッフ3人のほか20歳代から60歳代の男性25人が同市内2カ所で共同生活を営む。今年1日からは入所者の増加に伴い富士吉田市内にも10人収容できる施設を開いた。運営は入所者に各自自治体から支給される生活保護費やボランティアグループ、個人などの寄付金で賄われる。

グループを2つに分けて、朝の10時から午後2時までの時間は昼食を自由時間として、15歳でシンナーを始め、たばこ、東京都出身の30歳代男性は「違法と知っていたが、徐々に罪悪感が薄れた」。さらに18歳で大麻や覚せい剤を手に入れた。覚せい剤はR新大久保駅周辺の公園で友人からもらって、3回購入。見は一切述べ、ラン人からもらって、3回購入。

↑ 9月11日 山梨新報記事
↓ 9月8日 逗子・葉山 神輿参加

